

目次

序論	高校野球史の現在と可能性を探る	谷川 穰・白川哲夫	I
総論	高校野球一〇〇年のあゆみ	中村哲也	26
第1章	明治期宗教系学校と野球・研究序説——曹洞宗第一中学林を中心に——	谷川 穰	63
第2章	地域の野球を護るもの——京阪の運動具店と中央運動社——	黒岩康博	91
コラム●書いて楽しむ野球——大正期、京都一中の回覧雑誌から——／谷川 穰 108			
第3章	植民地朝鮮と甲子園——在朝日本人中等学校の野球史——	小野容照	112
第4章	満洲・台湾と甲子園	高嶋 航	140
コラム●女子野球／高嶋 航 175			
第5章	高校野球「雪国のハンディ」論の形成	白川哲夫	179
第6章	全日本少年野球大会始末——もうひとつの甲子園——	富永 望	206

コラム●「本当の高校野球」への渴望 — 全国高等学校校定時制通信制軟式野球大会とメディア —

／西原茂樹 232

第7章 高校野球部マネージャーの系譜 — 男子マネから女子マネへ — 高井昌史 236

第8章 甲子園大会の「国民的行事」化

— 一九七〇年代における新聞・雑誌報道の変容 —

西原茂樹 264

コラム●「野球記者」鈴木美嶺 — 「甲子園に來ることができて幸福だった」 — 萩原 稔 292

第9章 「公立優位県」富山県の分析

— 「夏の高校野球 都道府県大会決勝進出校データ」をもとに — 萩原 稔 296

高校野球・「甲子園」の歴史略年表 325

あとがき 331

●資料1 夏の高校野球 都道府県大会決勝進出校データ (1948-2017) 6

●資料2 夏の高校野球 都道府県大会決勝進出校における公立・私立比率 (1948-2017) 55

●資料3 春・夏の甲子園大会出場校における公立・私立比率 (1948-2018) 59

序論

高校野球史の現在いまと可能性を探る



谷川 穰・白川哲夫

一

「野球好き」に捧ぐ？

「野球、お好きですか？」

本書を手に取りられた方の多くは、この問いに「それはもちろん」「ええ、嫌いじゃないですよ」と返事して下さる。「お好き」な人たちではないかと推測する。なかにはマニア、オタクと呼ばれるような向きもおられよう。

今年（二〇一八年）は第一〇〇回目の「夏の甲子園」、全国高等学校野球選手権大会（一九四七年度以前の旧教育制度のもとでは「全国中等学校優勝野球大会」と呼ばれた）が開催される、節目の年にあたる。ただし、本書はそうしたタイミングに乗じた、また単に「お好き」な人たち向けの、マニアックな豆知識群の提供を意図したものではない。あくまで野球の歴史を学術的・多角的に考えること、日本野球史研究の一つのスタンダードや可能性を示すこと、そこに主眼をおいた、ある意味ではかたい研究書である。実はそうした日本の野球史、とりわけ「甲子園」という全国大会をもつ高校（の硬式）野球の歴史をメインテーマにした学術論文集は、おそらく初めて編まれ世に広く問われるものではないか、とも自負している。

本書は、野球とその社会的地位や支える制度・思想やモノ、意識の形成と展開を、さまざまな光をあてて歴史的に跡付けることをめざす。野球とひとくちに言ってもとりあげるべき対象はあまりに幅広い。そのためひとまず、旧制中学⇨新制高校の野球を主題に据えて、歴史研究の立場からその対象としての可能性を確かめてみよう、という試みである。

転換期を迎える高校野球

周知のように「甲子園」大会は、高校の部活動レベルでは、世界に類例を見ない規模のナショナルイベントでありつづけている。少し数字をみてみたい。各都道府県には野球部を統轄する高等学校野球連盟、その上に日本高等学校野球連盟（略して日本高野連）、さらに上部組織として日本学生野球協会が存在する。この日本高野連が毎年、全国の硬式野球部の加盟校数や部員数について調査し結果を公表している。それによれば、一九八二年には全国の部員数は一十万人台だったのが、九年後には初めて一五万人を突破、二〇一四年にはピークとなる一七万人を超えた。加盟校数では、平成に入った一九八九年から二〇一六年まで、ずっと四千校台をキープしていた。少子化の時代においてもなお全国に一五万人以上の部員がいる。一年生部員が三年生になるまで部に所属し続ける「残留率」も、一九八〇年代には七〇%台前半がほとんどだったのが、二〇一六年以降は九〇%を超え、最後の大会まで部員として活動する割合はむしろ増えている。また夏の甲子園大会における入場者数も、会期を五日間としてきたここ九年間はずっと八〇万人台で推移している。一試合平均では約一万七千〜八千人で、年末年始にかけて行われる全国高校サッカー選手権大会では二〇一七年度のそれが約六千三百人だったことと比べると、その規模はたしかに高校生のスポーツイベントとしては抜きんでている。そしてこの大会への出場をかけた各都道府県での試合が、

六月から七月にかけて全国で三千数百試合行われているのである。隣国の韓国にも高校野球の全国大会はあるが、現在野球部自体が数十校しかなく、日本とはずいぶん様子異なる。なぜこうした大会が日本に存在し、今まで維持され、人をひきつけてきた(と思われている)のか、という問いは自然とわいてくるだろう。

ただ、その数字の面でも、看過できない変化は生じている。二〇一八年には一年生部員の数が二年生のそれを初めて下回り、部員数全体も一六万人台を割るなど、減少する傾向が見られる。他方で、高校スポーツの統括団体である全国高等学校体育連盟に加盟する男子サッカー部員数は、二〇一四年に一六万人台に乗って以降、なお増加し続けている²。これらを踏まえると、時代が一区切りを迎えたという印象もうける。サッカーの台頭により野球「一強」の時代が終焉した、という表現にもなるかもしれない。

野球界全体でも、二一世紀に入り顕著な変化や重大な事件が生じている。まず二〇〇四年に、日本プロ野球機構が運営するプロ野球で、球団統合問題に端を発するストライキが初めて、選手会によって実行された。そして同年には四国でプロ野球独立リーグが誕生し、のちに北信越でも新たなリーグができあがり、活動を広げるようになった。また、社会人野球も曲がり角を迎えている。高度経済成長期には少なからぬ大企業が「ノンプロ」と呼ばれた野球チームをもち、高校・大学で活躍した選手を入社させ、都市対抗野球大会などの全国大会出場やその試合応援を通じて、社内の士気高揚もはかってきた。だが高度成長が終焉し、やがて低成長期へと進む九〇年代以降、そのチーム数は目立って減少し、ここ一〇年で全盛期の三分の一ほどになっている³。企業と日本経済の状況を如実に反映していると言えるだろうが、反面、企業丸抱えではない形態で活動を継続するクラブチームはそれと反比例して増加してきており、独立リーグ同様、また違った形で野球のすそ野が広がっているとの評価もできるかもしれない。さらに、女子プロ野球が二〇〇九年に発足⁴、翌年二チームで開幕し現在は三チーム(育成球団もある)で

リーグ戦が行われている。「野球＝男のスポーツ」という通念がゆらぎつつあるとも言えよう。

高校野球では、二〇〇七年に起こった、いわゆる特待生問題が新聞等で大きく報道された。日本学生野球憲章は「野球部員であることを理由として支給される学費などの授受」を禁じていたが、調査の結果、その条項に抵触する私立高校が三七〇校以上、該当する部員も八千名弱にのぼると報告された。これは他府県への「野球留学」に対する是非も含め、議論を呼んだ。さらに学校運動部全体に関わる社会問題として、二〇一二年一月に発生した高校バスケットボール部員の自殺という事件は、大きな波紋を投げかけた。原因が指導者による日常的な体罰であったことは、それまで野球部をはじめとする運動部において、体罰を容認する土壤が根強く、非合理的な指導がまかり通ってきた現実を、改めて問いなおす契機となった。野球部員の髪型、女子選手、教員の部活動指導の負担など、認識されてはいたが直視されてこなかったさまざまな事柄について、その是非をめぐる議論が重ねられつつある。

総じて、野球をめぐるさまざまな構造や制度の問題点があらわになり、見直しが進んでいる現状は、「成熟」あるいは新たなステージへ向かうべき歴史的転換期である。そう表現してさしつかえないのではないだろうか。

野球は今、歴史研究の対象たりうるのか？

転換期を迎えて、それまでの歴史を振り返り、行く末を見さだめる。一般的にそれは意義のあることだ、と認められるとしても、しかしなぜその対象が野球でないといけないのか、という問いは依然として残るだろう。現代社会がさまざまな抱える喫緊の課題を前に、今なぜ、何を呑気に野球なんか取り上げるのか――

もちろん、近代国家の国民統合とナショナリズムとの関係を、スポーツから問うことは無益ではない。また、古

典的著作を持ち出して、近代人とスポーツとの関係を人類学・社会学的に説明するやりかたも、依然として重要な場面はあるのかもしれない。ただそれにしても、なぜ野球なのか、とたたみかけられることには変わりない。

日本近現代史研究者の高岡裕之は、近現代日本のスポーツにおける野球の位置づけについて、興行として成り立つ野球界の規模の大きさを強調し、「野球を中心にスポーツを考えると多分間違える。野球は野球で、それ以外のスポーツの意味を考えないといけないと思いますね」と述べ、その異質性を指摘している[▼]。野球を見ても、近現代史におけるスポーツの位置づけはわからないのではないかと。事実、野球は日本国内の主要な高校スポーツのなかでは、例外的に全国高等学校体育連盟の管轄外にある。そうした特殊性が、野球だけの学術的論集が今までほとんど編まれなかった、一つの理由でもあろう。加えて指摘すれば、やはり野球に対する一般的な関心の高さは、依然として他のスポーツから抜きんでており、書店にならぶエピソード本の類も突出して多い。インターネット上も含め、膨大な個別の〈知識〉がすでに蓄積されている。人を魅了する物語や後日談、さらに優れたノンフィクション作品（書籍・映像とも）も、世に出続けている。これが、（あまりにも身近すぎた）野球に対する学術的接近が容易でなかった、また別の理由かもしれない。

だからこそ、学術的潮流や現代的要請から、あるいは「ファン」目線からも少し距離をとって見直すことで、野球を歴史的に考える土台・材料を提示する必要があるのではなからうか。後述するように、野球の歴史への社会的関心は近年少しずつ高まりつつある。そして、「夏の甲子園第一〇〇回」が振りまくメモリアル・ストーリーにあふれてもいる。そんな昨今の状況こそが、美談ばかりに呑気に回収されない、新たな視点をもつ野球史研究の好機であると思われる。本書のねらいの一つは、そこにある。異質なスポーツとされる野球が歴史研究の対象たりうるかどうか、その探求のきっかけ作りもめざしている。

さて世界的に見れば、野球、とりわけ高校野球を考えると、いう當為はあくまでローカルな日本の状況に注目することになるのは確かである。現在、大多数の国々では、トップスポーツとして定着しているのはサッカーである（女性への普及を念頭におけば、バスケットボールなどもそれに相当するだろう）。しかし日本ではその地位に、長らく野球が座ってきた。とりわけアジア太平洋戦争後の日本社会において、野球の試合は大観衆を集める一大娯楽、大々的なテレビ中継の対象でもあった。にもかかわらず、その社会的定着や「人気」を集める理由を、日本人・日本社会の特殊性で片付けることなく、どこまで意識的に主題化して論じてきただろうか。

戦後社会における野球の定着に関して考えるべき一つの要素は、新聞メディアとの関係だろう。戦前より「甲子園」大会を主催してきた朝日新聞社（夏）・毎日新聞社（春）が果たした役割はもちろんのこと（この点からの先行研究については後述）、アメリカの対日占領政策や世界戦略における日本の位置づけを念頭に置けば、読売新聞社とその牽引者であった正力松太郎の役割も視野に入つてこよう。一九三四年にアメリカのプロ野球選抜チームを招へいし、大日本東京野球倶楽部（のちの読売巨人軍）を創設した同新聞社社長・正力は、三六年に開始された職業野球（プロ野球）で球団オーナーとして、戦後も職業野球連盟の総裁として重きをなし、毎日新聞社と協力して現在のプロ野球二リーグ制を形成する立役者ともなった。原子力政策やテレビ放送も含めたアメリカに依存する「戦後体制」に大きな役割を果たした正力は、親米的な大衆娯楽の導入の面で、また自社の販売拡大戦略と関わつても、野球に多大な〈貢献〉をなしたと思われる。

もつとも、高校野球に関しては、テレビ放送で「甲子園」全試合を中継するようになる一九七〇年代以前には、新聞のスポーツ欄における記事、およびラジオ放送がより重要な情報源であり、かつ定着の一つの源泉だったので

はないかと思われる。そこから実際の試合の様子を思い描く多くの人々がいて、また子どもたちも野球への想像力をかき立て、父親なり年長の男性から野球の話を教わり、日々話題にすることで、あこがれや「人気」に火がついていったことも大いに考えられる。もしかしたら、実際に野球部に入って練習に明け暮れる以上に、野球「好き」を増やしたのかもしれない。また、九人对九人の正式な試合形式でなくとも、二人で向かい合つてのキャッチボールや、三角ベースのほう¹⁰が、むしろその欠如や気軽さゆえに、より参加しやすく、楽しむことができたのかもしれない。

これらは、簡単に歴史資料から実証できるようなことではない。だが、そうした「定着」や「人気」獲得という一筋縄ではいかない難題は、人間社会を考える重要なテーマでもある。野球におけるその過程を今すぐ確実に「捉える」ことはできないにしても、まずはおのおのが「眺める」ことから、その手がかりを得られるはずである。本書には、そのことを多少なりとも意識した論考が含まれている。

なおスポーツを歴史的に扱うという際、日本の場合は一九三〇年代以降の総力戦体制との関わりに集中する傾向がある。人々の体位の向上が図られ厚生省も作られる、国民の身体への介入が国家によって最も集約的になされた時代でもあり、その点では十分な理由がある。他方で、一九八〇年代以降の社会史の隆盛や、九〇年代に盛んとなった国民国家論といった学問的潮流は、あまりスポーツの歴史研究に影響を及ぼさなかったのではないか。特に後者では、近代国家の形成期であった明治時代に、言語や食生活、音楽などを通じてさまざまな文化統合・国民形成がなされるなか、運動・スポーツをその一つとして注目する研究は必ずしも多くない¹¹。明治時代には体育や運動自体への理解や認識が高くなかった、という事情もあるろう。だが、ことアカデミックな歴史学においては、何を題材にしても国家の拘束力の強さが強調される結論に至る、お手軽な論文らしきものを増やしたただけだ、との暗黙

の批判もあつたように思われる。それは研究対象の広がりによって一定のブレイキをかけ、歴史学としてなすべきテーマはこれだ、と決めてかかる視野の限定と（「この」時世なのに」との呼号とも）隣り合わせでもある。いきおい、「スポーツ史」「スポーツの歴史社会学」という分野でやるものだ、という見方も強くなり、広く日本近現代史を見通す対象となりにくかつたのではと考えられる。

「甲子園」の手前にあるもの

「甲子園」大会には、高校生の「汗と涙と感動の物語」がつきものである。先にも触れたが、その点に私たちはいわば慣らされ、またそれをどこかで欲する、消費したがるところがないとは言いきれないだろう。あるいは大会にやってくる強豪チームの興亡史、ドラマチックな試合展開やサイドストーリーに目を奪われがちでもあるのではないか。ただ、歴史の光をあてることは、単にそうしたものの再確認やトリビアルな知識の披露にはとどまらない。

「甲子園」大会を形成する大きな土台は、それへの出場チームを決定する各道府県の大会である。だが、そこで早々に敗退する圧倒的多数のチームは、強豪列伝の系譜で捉える歴史像からは全く見えない存在である。二〇一二年度からは部員不足の学校同士で結成される連合チームが、日本高野連の規定緩和により多く見られるようになった。これは学校の枠にとられないチームのありかた、また少子化に対応する方策として重要な動きであるが、「甲子園」ありきで考えると、その存在はなかなか認知されがたい。

また戦前にさかのぼると、日本の植民地・外地の代表が「甲子園」にやってきたことも、大会の歴史を振り返る際にはエピソード程度でしか扱われない。日本が台湾・朝鮮などを植民地として支配し、また満洲にも勢力を及ぼ

してゆく、その道程の一端を「甲子園」は映すものでもある。戦死した元球児の物語などをもとに「野球ができる平和な世の中に感謝」することが一般的な認識として口にされるが、日本の（そして東アジアの）近現代史への理解とともに野球を捉えなおす余地は——逆に野球から捉えなおすことも——まだ多く残されているだろう。¹²

勢いついでに言えば、「甲子園」のような全国大会の存在を無前提に善とする考え（あらゆるジャンルで「〇〇甲子園」と銘打った大会が叢生している）、もつと言えば他者と争い優越することをよしとするなど、無意識に受け入れている私たちの価値観を、「甲子園」は体現しているのではないか。本書はそれらを直接に論じるわけではないが、そんな立場からも近代社会の歴史を「眺め」なおす契機を、含んでいるつもりである。

以上のような問題意識やねらいをもつ本書も、むしろ多くの先学の研究成果を踏まえつつ進められる必要がある。ここからは、野球史の研究の歩みについて、述べていきたい。紙幅の関係上野球に焦点を絞った研究に限定し、その整理を試みる。

（谷川 穰）

二

これまでの「野球史」研究

日本における「人気」スポーツとしての野球の歴史は、すでに一世紀以上に及んでいる。近年若年層の関心においてはサッカーなど他のスポーツが上位を占める調査結果などもあるが、観客動員数や全世代を通じての関心度においては、いまだ最も人気のあるスポーツとしての地位は維持されている。この事実にかんがみると、日本社会の特質を説明するひとつの手段として、「人気」スポーツとしての野球の歴史を追ってみるのは、有効ではないかと

考えられる。

ただ、第一節でも述べたように、その「人気」に比して、野球史に関する学術研究の蓄積は多いとは必ずしもいえない。これは野球に限ったことではないが、歴史学研究においてスポーツをどう取扱うかということについては、十分にその方法と意義が認知されているわけではないと考える。少なくとも歴史学界の主要と目される雑誌・出版物において、野球に限らずスポーツに関連する論稿が掲載されることはまれである。本書で掲載する諸論稿は、そうした現状に対する一定の問題提起でもあるし、繰り返しになるがスポーツ、特に野球を歴史学の素材として扱うことにはいかなる可能性を見出せるのかという問いも含んでいる。本書では、歴史的な検討を糸口として「人気」という一見得体の知れない、不安定とみえる社会現象に迫ることができないかと考えている。そして最も人気のあるスポーツとして多くの人々が関わってきた野球を扱うことは、そのまま日本近現代史の一面をみることにつながるだろう。こうした視点のもとに、以下で「野球史」に関するこれまでの諸研究を概観する。

「野球史」について書かれた文献は、かりにそのカテゴリーを設定するなら相当な数に上るだろう。しかし、学術研究という観点からみたとき、その意識をもつて書かれているもの、ないしは批判に耐えうるレベルで書かれたものは、実際には非常に少ない。ともあれ、「野球」と「歴史」が結び付いた文献のうち最も基礎的なものとしては、古くは広瀬謙三『日本の野球史』（日本野球史刊行会、一九六四年）や大和球士『真説 日本野球史』全五巻（ベースボール・マガジン社、一九七七～七八年）などの著作がある。しかし意外にもというべきかもしれないが、その後日本の野球に関する通史的な文献は編まれていない。この理由としては、野球は少年野球からプロ野球まで各カテゴリーそれぞれに歴史があり、通史はそのカテゴリーごとにまとめられていて、競技としての野球の歴史を総合的にまとめるのが難しいという問題があるからだろう。

プロ野球についてはベースボール・マガジン社が四〇年史以来一〇年ごとに年史をまとめており、高校野球では春の選抜大会・夏の選手権大会それぞれについて大会史がまとめられているが、高校野球の通史としては森岡浩が一〇〇年の歴史をまとめたものが読みやすい¹³。また、大学や社会人を含め、大会やチームごとに編まれた歴史書は膨大な数にのぼる。これらは多くはエピソードの集積や記録集となっているが、研究を進める上では基礎的な資料であり、それぞれ丹念に読み込む必要がある¹⁴。

こうした「野球史」の現状ではあるが、学術的な研究の動向を概括すれば、大きく分けて四つの流れを見出すことができるだろう。第一は、野球というスポーツのもつイデオロギーの側面に注目した諸研究である。その中で注目されているのは、一九三二年（昭和七）三月の文部省第四号訓令「野球の統制並に施行に関する件」（いわゆる「野球統制令」。以下本文中では「統制令」とする）であり、この「統制令」を中心とした特に戦前における野球界「統制」の動きについて、たとえば加賀秀雄、高津勝、草深直臣らの研究が積み重ねられ、近年では坂上康博、中村哲也らの研究¹⁶を挙げることができる。これらの諸研究では、戦前の野球統制の動きとそれに対する野球界の対応が、戦後に制定された学生野球憲章に代表されるように、一定程度現在に至る日本の野球界に残る諸問題へとつながっているということを明らかにできており、現在も野球の歴史における定説となっている。

第二は、メディア史研究の観点から行われているもので、代表的な研究としては有山輝雄、西原茂樹、佐藤彰宣ら¹⁷を挙げることができる。有山は、甲子園球場で行われた中等学校野球の全国大会が、主催者の『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』の経営戦略の一環としてはじまるメディア・イベントであり、大衆娯楽であったことを強調する。また、大会そのものが一度負けたら終わり、のトーナメント制採用や、植民地からの出場校をも含むところから優勝劣敗と帝國的秩序を象徴しており、「武士道精神」に基いた野球、という理念にとって理想的な試合や選

手のエピソードは「美談」として語られる、という指摘もしている。また西原は、大衆娯楽としての野球の受容の側面をより強調するとともに、主として野球を始めとするスポーツイベントに取り組んだのは関西の新聞社であり、東京ではそれほどでもなかった、という地域差について指摘をしている。こうしたメディア戦略の一環としての野球という面では、後発の職業野球（プロ野球）についても同様の位置づけがなされている。佐藤はスポーツと「教養」との結びつきを重視する中で、「読むスポーツ」を分析する材料として、野球雑誌『野球界』や『ベースボールマガジン』を発行したベースボール・マガジン社の歴史を取り上げている。

第三は社会学的なアプローチで、当該期の思想や文化、経済情勢などとの関わりにも留意し、また社会的影響などにも注目するものである。この観点で野球史を論じたものとしては、菊幸一の研究が代表的である。菊はプロ野球の成立について、プロ・スポーツの社会的成立条件を説明するため、として一般化し、段階ごとに整理しており、野球のルールの整備段階から、野球イデオロギーの成立、新聞社や鉄道会社の発展、マスメディアと大衆社会の発達、といった背景に目配りしながら論じている。

第四に、戦前の大日本帝国時代に支配を及ぼした地域で行われた野球に関する研究である。この分野については従来西脇良朋がまとめた著書がほぼ唯一にとどまっていたが、最近高嶋航、小野容照の成果が相次いでまとまり、研究水準が一挙に上がったといっている。¹⁹

こうした中で、近年では野球の歴史に関する社会の関心が、以前と比べ高まってきたようである。二〇〇九年には甲子園球場に甲子園歴史館が整備され、それまでの阪神タイガース史料館が新たに高校野球や甲子園ボウルの関連資料も展示する形に拡充された。一三年には野球体育博物館が野球殿堂博物館と改称し、野球史に関する研究・調査のニーズに応える体制を整えている。また、地域史の観点から野球史を扱う企画展が、一三年には長野県立歴

史館で、一七年には北海道博物館で開催された。²⁰ さらに一四年から一五年にかけて、カナダに存在した日系人野球チーム・バンクーバー朝日を描いた「バンクーバーの朝日」や、戦前の中等野球における嘉義農林学校の活躍を描いた台湾映画「KANO 1931 海の向こうの甲子園」が相次いで日本で公開された。

また、高校野球やプロ野球については歴史を掘り起こす形の著作や競技者の評伝などの出版も近年盛んに行われている。これらは学術的な内容ではないものも多いが研究を進める上では基礎的な資料となる。このうちプロ野球の歴史については、山室寛之が戦前〜戦後を中心にまとめているほか、²¹ 現在すでに存在しない球団の歴史をまとめた長谷川晶一、山際康之の成果が貴重である。²² また綱島理友『日本プロ野球ユニフォーム大図鑑』全三巻（ベースボール・マガジン社、二〇一三年）は著者が長年追ってきたプロ野球各球団のユニフォームの歴史をまとめたもので資料的価値が高い。

「野球史」研究の課題

本項では、前項で述べた「野球史」の先行研究を含め、これまでの「野球」に関する歴史叙述全体が抱える問題と、今後研究を進めていくべき方向性について若干の提言を試みたい。

まず「野球」が歴史叙述の対象となる時、どうしても陥りがちな傾向がある。それはたとえば著名な選手や指導者、あるいは強かったチームが中心的に描かれ、その関連でのエピソードや記録集の集積をもつて、歴史叙述としてしまうのである。高校野球を例とするなら、強かった学校、有力校の勢力変遷史と、その間に現れた著名な選手・指導者が延々と羅列されていくのである。しかし、なぜその学校が強かったのか、あるいはなぜ優れた選手・指導者が特定のチームに存在しえたのか、といった背景説明まで踏み込む文献は少ない。その部分は野球に携わる

人々やスポーツジャーナリズムの世界では前提になっていくのかもしれないが、何らかの社会的背景を抜きにして、強いチームも優れた選手も存在することはできない。

さてもつとも「野球」に関する学術研究として進んでいるのは、「統制令」に代表される戦前の野球界の状況を分析したものである。一連の研究で、野球界を始めとしたスポーツに対する文部省の政策と、野球界の対応についてはかなりのところまで明らかになっていると考えられる。しかしそれらはいまだ制度史や政策史的叙述、ないしは野球界の指導的立場にあった人物の言論を中心としており、現実にプレーしている選手・指導者や、野球を観戦するファン側の視点については必ずしも十分に検討されていない。たとえば公的に主張された「武士道精神」に基づく野球、という論理を人々はどこまで受け入れていたのか。これまで研究されていたのはいわば「タテマエ」の部分に過ぎないのであつて、選手や観客の「ホンネ」の部分も併せて「野球史」を描く段階に入ってきているのではないか。あるいは「タテマエ」と「ホンネ」という分け方自体果たしてできるのか、という問いもありうるだろう。またこうした野球界の「統制」を問題視する研究は、戦後の学生野球界にも「精神主義」的な部分が残っている、として現代の問題へとつなげてくるのだが、坂上や有山が主張しているように、戦後は戦前とは違った独自の野球観（この説明も充分にはなされていないが）も展開したという面をどう評価するのかが明らかではない。これはより大きな日本近現代史の枠組みでいえば、戦前・戦後の連続説と断絶説の対立でもあるが、単純にどちらの側面が強かったか、ではなく、戦前・戦後に通底した日本における「野球」というスポーツの「人気」の社会的基盤を分析する必要があるだろう。

メディア史的視点からの研究も一定程度の蓄積があるが、それはもっぱらメディア側の経営戦略や言説分析の視角に留まり、読者や観衆の側の視点についてはほとんど検討されていない。社会的な研究においては、野球界の

発展の歴史が図式的に描かれたり、あるいは受容のあり方を現代風俗や民俗の一樣式として位置づけるものであったりするので、歴史学の観点からいえば問題を残す叙述になっている。

以上は「野球史」に関する研究動向個々に関する問題点であるが、諸研究に共通する問題点としては、日本の野球界を「一樣」なものとしてとらえる傾向が強い。たとえば冒頭で紹介したようなカテゴリー別でも、あるいは地域によっても様々な「野球」がありうるはずだが、制度史やメディア論の世界に落とし込んでしまうために見えなくなっている部分が多いのではないかと考えられる。²³ その部分というのが、「野球史」研究を単なる分野史と認めない議論の広がりをもたせるには重要ではないかと考える。ひとまずここでは、以下の六点ほどに整理して提示してみたい。

第一は野球と地域との関わりである。現在、特に高校野球で典型的に現れているような郷土意識や地域主義は、どのようにして形成されてきたのだろうか。そうした「郷土」や「地域」という問題については日本近代史においても議論の蓄積があるが、²⁴ 高校野球はその観点からいうと特に戦後社会でのそれを考える上で重要な素材であると考えられる。近年のプロスポーツにおいて「地域密着」がなぜ叫ばれるようになったのか、とも併せて考えると、近代以降の日本の「地域」という問題を考える上でスポーツ（野球）を扱うことに一つの有効性を想定したい。

第二に、学校教育と野球との関わりである。一般論として学校の部活動を中心に日本の野球が発展してきたということが言われているが、意外にも学校教育や学校経営との関わりといった観点からの歴史学的研究は、管見の限りでは見当たらない。二〇〇七年の野球特待生問題に示されているように、学生野球は特に私立学校の経営戦略と密接に関わっていると考えられるが、このような構造が出来上がった過程については、実際にはあまり明らかに

なっていない。野球部の活動に力を入れているある中高一貫校の校長が、二〇〇八年に新聞の取材に対して以下のように述べている。

「経営的にはぎりぎり。でも、学園を活性化させるのは野球しかない。」²⁵

この言葉には、単なる「教育」や「人気」では片付かない重要な問題が示されているように思う。なぜ他の方法ではなく「野球しかない」のか。学校経営という問題と、こうした発想の生まれる背景を探る野球史研究を構築する必要がある。

第三は、社会的マイノリティにおける文化の伝播・受容の問題の一つとして「野球史」を位置づけてみるということである。たとえば北海道や沖縄への野球の伝播について考えることができるかもしれない。さらに選手単位に焦点を当てれば、戦後の一時期プロ野球界をにぎわせたアメリカ移民出身選手や、大半が日本名でプレーしている日コリアンの選手がいる。²⁶ マイノリティの社会とスポーツの関係をどう考えるか、²⁷ という上でも、日本においては野球という素材が重要である、と考えられる。

第四は、ジェンダーの観点からみた「野球史」の必要性である。現在では野球の各カテゴリーでも女性のプレイヤーは認められているが、高校野球だけがいまだ門戸を閉ざしている。なぜ高校野球だけがそうなのか、というのはそれ自体問題だが、大正時代には日本でも女子野球が始まっており、一九五〇年にはプロ野球も発足していた。²⁸ しかしプレイヤーとしての女性の存在は社会的に定着しなかった。もちろんファンとしてなら戦前から女性も一定程度存在していたが、野球「人気」あるいは「武士道野球」のような野球イデオロギーと女性との関わりは、これまで全く議論されていない。スポーツと女性という問題を考えるときにも、「野球史」は極めて重要な事例となるだろう。²⁹

第五は、野球に付随した周辺文化の歴史を考えることである。プレーするチーム、選手の側からみた歴史だけではなく、観る側、すなわちファンのあり方からみる「野球史」もありうる。野球雑誌、スポーツ新聞などのジャーナリスティックなものから、グッズ・応援スタイル・球場などの変遷やその社会的意味も題材として考えられる。また、描かれる野球という面で文学作品、映像作品、漫画等で扱われた野球に関する考察も、まとまった研究としてはまだまだ少ないと思われる。野球に関わるこれらの周辺文化の歴史を、ある社会における「人気」とは何か、を論じる一つの手がかりとして考えられるのではないだろうか。

第六に、野球というスポーツそのものの変化をきちんと跡付けることも重要だ。練習方法や試合における戦術の変化、用具の変化が与えた影響など、資料をみれば指摘は数多いがまとまった歴史としては叙述されていない。³²

以上挙げてきたような問題設定は、それが「野球史」を扱うことでなければ解明できないとは必ずしも言えない。ただ、日本社会においては、事実として野球「人気」の高さがあり、それに寄りかかった社会的諸事象が発生した。その歴史自体を問題の俎上に載せるために、十分な学術的考察が必要であると考える。（白川哲夫）

三

本書の構成

本書はこうした認識を踏まえたうえで、総論と九つの各論を配し、それを補う四本のコラムに加え、巻末資料を掲げている。総論は、前項で指摘した論の第六、すなわち「野球というスポーツそのもの変化」を意識した高校野球史の見取り図である。統計データを駆使し、また新たな指標も用いつつ、これまでにない歴史の捉え方を提示

している。まずここを一読いたたくとして内容紹介は省き、各論以下を概観しておきたい。

各論は大まかに扱う時代順となっており、第一章から第四章までは戦前の、第六章から第九章までが戦後を扱う。そして第五章が両方の時期にわたり、架橋する役割を担っている。第一章は明治末期の宗教系学校における野球部の活動に焦点をあてる。とくに野球部の生徒は不良であると公言した禅僧・田中道光と、彼が校長を務めた曹洞宗第一中学校に注目する。今ではいわゆる強豪校も多い仏教系学校だが、大正期に至る野球熱の高まりとは異なる道筋をたどる学校もあった。その過程における、田中の発言や教団の意図を窺おうとする。第二章は、大正期に京阪地域で行われた野球大会とその主催団体を扱う。といっても、「甲子園」大会と新聞社ではない。関西学生連合野球大会・実業団野球大会と、運動具店の美津濃（ミズノ）、そして運動具や雑誌を通じ野球普及につとめた中央運動社の動きにスポットをあてる。当たり前だが、野球には道具が必要である。地域に野球が根付く過程で、運動具店はその当たり前の需要を満たす以上の役割を果たしたことが明らかにされる。

つづく二つの章はともに帝国日本の植民地を主たる対象にすえる。くしくも両章が冒頭で触れるように、前述の映画「KANO」の公開を機に、植民地における中等野球への注目が多少高まったが、その全容の検討はまだ道半ばである。その点で、第三章は朝鮮の、第四章が台湾と満洲のそれを明らかにする、きわめて有益な論考と言えるだろう。前者は、すでに植民地統治期の朝鮮野球について一書をなした筆者の手になる。朝鮮人側からみた同書に対して、主として在朝日本人の側からその動きを見直し、野球からみた日本人の植民地経験を描く。そして後者は、台湾と満洲とを比較して、そのチームの人種構成や練習試合の相手など、その顕著な相違を指摘する。とくに、学校長の存在やイニシアチブが、チームの強化や存続に際して大きな意味をもったとの見解は興味深い。内地との差異・共通性を考える重要なカギが、他にいくつも拾い出せよう。

第五章が対象とするのは高校野球界における「雪国のハンディ」をめぐる歴史である。冬季に十分な練習ができないという「雪国」勢の絶対的不利は、現在に至るまで連綿と指摘され続けてきた。そしてそのハンディを乗り越えるという「物語」が、多くの人々をひきつけてやまないのは、二〇一八年夏の秋田・金足農の準優勝に対する社会の反応をみても明らかである。しかしそれは本当に「絶対的」な不利だったのか。大正時代から現代までの歴史を通観しながら、いわば高校野球と「地域性」の問題を扱う内容となっている。

第六章は高校野球とは直接関係しないが、今やその存在が幻ともなった全国規模の軟式少年野球大会について、おそらく初めて詳細に明らかにしたものである。プロ野球を社会に根付かせることに尽力した正力松太郎率いる読売新聞が、「もうひとつの甲子園」となりうる大会を興し、そして挫折したという興味深い事実は、甲子園大会の存在の自明性や、「戦後」という時代と野球との関係を問うものである。

続く二つの章は、高校野球の「人気」に着目した内容である。まず第七章は高校野球部マネージャーという存在の変遷を通じて、高校野球と男性・女性それぞれの関係性を問い直すものである。高校野球部マネージャー＝女性という現代に定着した表象が、そもそも野球部の危機に対応するための転換を経たものであったという事実意外性がある。そして高校野球「人気」の低下に対して女性への門戸開放策が実施されたという指摘は、近未来の高校野球に起きうる変化をも示唆しているといえよう。

第八章は高校野球が「国民的」なイベントとなっていく過程を、マスメディア報道の変化に着目して明らかにしたものである。東日本と西日本での報道の温度差や、高校野球のあり方批判の報道がいつから増え始めるか、プロ野球人気・サッカーブームとの関連性など、その変化の面期を一九七〇年代にみるとともに、高校野球「人気」を作り出し、あるいは現在も作り出している構造に迫っている。

第九章は富山県をフィールドとして、高校野球における強豪校の変遷と、同県の教育制度の歴史が密接に関係していることを明らかにしたものである。富山県は現在でも公立の実業高校が甲子園出場することの多い地域であり、全国的な趨勢とは異なっているが、その理由を野球界の動向にとどまらない社会的背景から探ったものである。

巻末資料は第九章と大きく関わる、春・夏の「甲子園」と、夏のそれへ向けた各都道府県大会に関するデータ集である。とくに資料1・2は、編者を含む本書のメンバー5名が、かねてより続けてきた研究成果の一端であり、戦後の高校史を単なる強豪列伝ではない形で捉える試みである。すなわち、都道府県大会決勝進出校における公立校・実業校・私立校という学校種別の割合変遷に着目し、時期区分を行つていこうというものである。もちろん、そもそもの公立普通科と実業系の学校自体の割合の変化（一九六〇年代には公立高校生徒のうち四割以上が実業系学校ないし課程に通つていたが、七〇〜八〇年代には目立つて減少、現在では普通科生徒が七割を超えている）や、私学の全体に占める割合の変化などにせよ、さらに気づかされる事柄は多いかもしれない。だがそこはあえて語らず、現段階の基礎研究の成果としてひとまず示しておいた。そして総論・各論で説ききれなかったことへの展望を含むコラムを、また通史的理解を助ける意味で略年表を、それぞれ付してある。

なお、総論以下の記述においては、章によつて「高校野球」「甲子園」の語の用法に多少ばらつきが見られるが、あえて統一はとらなかったことを付記しておく。基本的には、「高校野球」という語は、戦後の新たな教育制度になつて以降の高校の硬式野球だけを扱う（中等野球と区別する）場合と、戦前における旧制の中等学校のそれとあわせて用いる場合（たとえば「高校野球一〇〇年の歴史」といった表現）とのいづれかをさす。また「甲子園」の語は、

多くの場合、単に春・夏の全国大会という意味である。ただし、甲子園球場が会場となる（一九二五年）以前の時期も含まれる点に留意し、「全国大会」の語を用いる場合もある。そして本書の表題では、「高校野球」・「全国大会」を包括する象徴的・慣用的な語として、「甲子園」をカギカッコ付きで用いている。

本書の執筆メンバーは、野球史の専門家ばかりではない。いや、むしろそれは少ない。近現代の日本や東アジアのスポーツを扱った学術論文・専門書を、すでに世に問うている社会学者・歴史学者も数人含まれるが、編者二人の専門領域は日本近代史で、戦没者慰霊を中心とする戦争と地域の歴史や、仏教を中心とする宗教史・教育史に、一つの軸足をおく者と目されている。ただ同時に、それぞれの見方や熱量は違えど、野球が「嫌いじゃない」ほうである。マニアックな関心をこえて論じるべきテーマに、またそれぞれの「眺め方」でアプローチしている。

本書の試みの成否は、読者の皆さん——「お好き」な方かどうかは問わず——に、ご判断いただくほかかない。ただ、もつと歴史のグラウンドに降りて見つめたいと感じてもらえたなら、また球場に居ながらにしてさらなるテーマへ思いをめぐらせてもらえたなら、本書の望みの一つは達したことになるだろう。（白川哲夫・谷川 稯）

註

- 1 全国高等学校野球連盟HP「部員数統計（硬式）」（http://www.jhbf.or.jp/data/statistical/index_koushiki.html）、二〇一八年七月二〇日閲覧。
- 2 全国高等学校体育連盟HP「加盟登録状況」（http://www.zen-kouairen.com/f_regist.html）、二〇一八年七月二〇日閲覧。
- 3 一九六三年には二三七社が日本野球連盟（社会人野球チームの統括組織）に加盟していたのが、高度成長期が終わった

一九七八年には一九七九チーム、山一証券が破綻した翌年（一九九八年）には一四二チーム、そしてその五年後には八九チームへと激減していき、以後ほぼ八〇チーム台で推移している。公益財団法人日本野球連盟HP「加盟チームの推移」(<http://www.jaba.or.jp/ceam/clubteam/sui.pdf>、二〇一八年七月二〇日閲覧)。

4 正確には、一九五〇年から五年の間に存在した日本女子野球連盟の運営するプロリーグ以来、約六〇年ぶりの復活であった。

5 「高校野球特待生問題有識者会議小委員会検討結果の報告」二〇〇七年一〇月四日付、四頁 (<http://www.jihf.or.jp/scholarship/pdf/return3.pdf>、二〇一八年七月二〇日閲覧)。

6 高岡裕之「日本近現代史研究にとつてのスポーツ」、『一橋大学スポーツ研究』二九、二〇一〇年、五四〜五五頁。

7 もつとも、現代世界の野球とグローバル化の關係に迫るものとして、季節に応じてとくに中南米諸国のリーグを渡り歩く選手たちのありようを描いた、石原豊一『ベースボール労働移民』（河出書房新社、二〇一三年）のような研究成果もある。

8 有馬哲夫『原発・正力・CIA』（新潮社、二〇〇八年）。正力は初代原子力委員会委員長であり、一九五七年には岸信介内閣のもとで科学技術庁長官と国家公安委員長を兼ねた。

9 谷川穰「透明ランナーは捉えられるか―勝手に走り出す戦後子ども史・オープン戦」、『教育史フォーラム』三、二〇〇八年）は、人数不足でも野球で遊べる工夫としての透明ランナー（架空の走者を置く）というルールについて論じ、子どもの正式な野球試合のイメージとそれを埋める想像力がそうした工夫につながったのではと示唆している。

10 正式な野球の試合では、一塁・二塁・三塁・本塁の四つのベースを用いて（その四角形で「内野」を形成する）守備を行うが、人数が少なくても野球を楽しめるよう、二塁を除いてプレーするという工夫が編み出された。明治期にはすでに行われていた（この点、第一章および谷川コラムでも触れられている）。

11 たとえば吉見俊哉ほか『運動会と日本近代』（青弓社、一九九九年）などが挙げられるが、総力戦期については、単行本だけでも坂上康博・高岡裕之編『幻の東京オリンピックとその時代―戦時期のスポーツ・都市・身体』（青弓社、二〇〇九年）、佐々木浩雄『体操の日本近代―戦時期の集団体操と〈身体の国民化〉』（青弓社、二〇一六年）など数多く蓄積されているのに比べると、乏しいことは否めない。

- 12 たたとえば一九四一年の大会中止以後、戦後まで「甲子園」大会は開かれなかったが、それが対英米開戦（一九四一年二月）より前の、同年七月中旬の文部次官通達により地方大会途中で中止されたためであったこと（総論参照）は、おそらくあまり認識されていない。アメリカとの戦争によって、「敵性競技」とされ、元球児が戦地に次々送られ戦死するなど国家に翻弄される悲哀を味わったのだ、という理解に加えて、まだ共有すべき事実が多々あるように思われる。
- 13 森岡浩『高校野球一〇〇年史』（東京堂出版、二〇一五年）。
- 14 近年のものでは、『北海道野球部百年物語』（北海道高等学校野球部史制作委員会、二〇〇九年）が対戦相手校元選手のインタビューを多数掲載することにより、自チームの視点に加えて相手側から自分たちがどう見えていたかを明らかにしている点で、特異な内容である。
- 15 加賀秀雄「わが国における一九三二年の学生野球の統制について」（『北海道大学教育学部紀要』五一、一九八八年）、高津勝「政策としてのスポーツ」（中村敏雄他『スポーツを考える』シリーズ4 スポーツ政策、大修館書店、一九七八年）、草深直臣「野球統制令」の廃止と「対外競技基準」の制定過程の研究」（『立命館教育科学研究所』二、一九九二年）。
- 16 坂上康博『につぼん野球の系譜学』（青弓社、二〇〇一年）、中村哲也『学生野球憲章とはなにか 自治からみる日本野球史』（青弓社、二〇一〇年）。
- 17 有山輝雄『甲子園野球と日本人メディアのつくったイベント』（吉川弘文館、一九九七年）、西原茂樹「東京・大阪両都市の新聞社による野球（スポーツ）イベントの展開過程—一九一〇—一九二五年を中心に」（『立命館産業社会論集』四〇—三、二〇〇四年）、同「一九一〇—三〇年代初頭の甲子園大会関連論説における野球（スポーツ）の教育的意義・効果に関する所説をめぐって—『大阪朝日』『大阪毎日』社説等の分析から」（『立命館産業社会論集』四一—四、二〇〇六年）、同「甲子園野球の『物語』の生成とその背景—明治末期—昭和初期の『青年らしさ』『純真』の言説に注目して」（『スポーツ社会学研究』二二—二、二〇一三年）、佐藤彰宣『スポーツ雑誌のメディア史 ベースボール・マガジン社と大衆教養主義』（勉誠出版、二〇一八年）。
- 18 菊幸一『近代プロ・スポーツ』の歴史社会学』（不味堂出版、一九九三年）。
- 19 西脇良朋編・発行『台湾中等学校野球史』（一九九六年）、同編・発行『満州・関東州・華北中等学校野球史』（一九九九年）、同編・発行『朝鮮中等学校野球史』（二〇〇〇年）、高嶋航『帝国日本とスポーツ』（塙書房、二〇一二年）、同『軍隊

- とスポーツの近代』（青弓社、二〇一五年）、小野容照『帝国日本と朝鮮野球 憧憬とナシヨナリズムの隘路』（中央公論新社、二〇一七年）。
- 20 長野県立歴史館「信州の野球史」二〇一三年六月二十九日〜八月一八日、北海道博物館「プレイボール！北海道と野球をめぐる物語」二〇一七年七月八日〜九月二四日。
- 21 山室寛之『野球と戦争―日本野球受難小史』（中央公論新社、二〇一〇年）、同『プロ野球復興史―マッকারサーから長嶋四三振まで』（中央公論新社、二〇一二年）。同『背番号なし戦闘帽の野球―戦時下の日本野球史』（ベースボール・マガジン社、二〇一六年）。
- 22 長谷川晶一『最弱球団 高橋ユニオンズ青春記』（白夜書房、二〇一一年）、山際康之『広告を着た野球選手―史上最弱ライオン軍の最強宣伝作戦』（河出書房新社、二〇一五年）
- 23 以下で述べた視点のいくつかについて社会学の立場から意識的に取り組んだ成果として、清水論『甲子園野球のアルケオロジー―スポーツの物語・メディア・身体文化』（新評論、一九九八年）、江刺正吾・小椋博編『高校野球の社会学』（世界思想社、一九九四年）がある。
- 24 たとえば成田龍一『故郷という物語―都市空間の歴史学』（吉川弘文館、一九九八年）、古厩忠夫『裏日本』（岩波書店、一九九七年）。
- 25 『毎日新聞』二〇〇八年五月二八日付。
- 26 こうした選手たちに焦点をあてた文献としては、たとえば金賛汀『甲子園の異邦人』（講談社、一九八五年）、関川夏央『海峽を越えたホームラン』（双葉社、一九八四年）。
- 27 アメリカの野球については、たとえば「ニグロ・リーグ」と呼ばれた黒人野球に関するまとまった研究が行われている。その事情については、佐山和夫『黒人野球のヒーローたち「ニグロ・リーグ」の興亡』（中央公論社、一九九四年）、を参照。
- 28 常陸純一『私の青空 日本女子野球伝』（径書房、一九九五年）、谷岡雅樹『女子プロ野球青春譜1950』（講談社、二〇〇七年）。
- 29 この点を意識した研究としては、高井昌史『女子マネージャーの誕生とメディア―スポーツ文化におけるジェンダー形

成』(ミネルヴァ書房、二〇〇五年)が貴重な成果である。

30 プロ野球の応援団に関する研究としては、高橋豪仁がカルチュラル・スタディーズの枠組みで取り組んだものがある。高橋「広島市民球場におけるプロ野球の集合的応援に関する研究」(『スポーツ社会学研究』二、一九九四年)、同「プロ野球私設応援団の低位文化研究」(『体育学研究』五一―二、二〇〇六年)。

31 その中で代表的なものを挙げるとすれば、米沢嘉博『戦後野球マンガ史』(平凡社、二〇〇二年)。

32 たとえば福井元の研究などは、バットという用具の変化が与えた影響を歴史的に検証するものである。福井「高校野球界における金属製バットの導入と技術・戦術の変容―昭和40年代以降の甲子園大会を中心に」(『スポーツ史研究』一五、二〇〇二年)、同「金属製バットの新規制(二〇〇一年)が高校野球の戦術に及ぼした影響―野球の技術史に関する研究の一環として」(谷釜了正教授退職記念論集刊行会編・発行『スポーツの歴史と文化の探究』二〇一八年)。